

設問番号	1.
解答又は 解答例	文化相対主義とは、ある文化の習慣や価値観を、自分たちの文化の基準によって一方的に判断するのではなく、その文化が形成されてきた歴史的・社会的背景や、その文化に生きる人びとの価値観に即して理解しようとする考え方である。文化人類学では、異なる社会を研究する際の重要な基本姿勢の一つとされている。 私たちは日常生活の中で、自分が育った社会の常識を当然のものと考えやすい。たとえば、食事の仕方、家族関係、宗教儀礼、結婚、服装などについても、何が「普通」で何が「正しい」という基準は文化によって異なる。自文化の価値観を基準として他文化を「遅れている」「おかしい」「野蛮である」などと評価する態度は、自文化中心主義と呼ばれる。文化相対主義は、このような見方を避け、異文化をその文化自身の文脈の中で理解しようとするものである。 たとえば、ある社会の宗教儀礼が外部の人間には非合理的に見えたとしても、その社会の人びとにとっては、祖先とのつながりを確認したり、共同体の結束を強めたりする重要な意味を持っている場合がある。また、食文化についても、ある国では一人ずつ料理を分けて食べることが普通である一方、別の社会では一つの料理を皆で共有することが親密さの表現になることもある。このような違いを単純に優劣として捉えるのではなく、「なぜそのような習慣が存在するのか」と考えることが文化人類学的な理解につながる。 文化相対主義の大きな意義は、異文化に対する偏見や差別を減らし、多様な文化を理解する可能性を広げる点にある。特に現代社会では、国際化や人口移動によって、異なる言語、宗教、生活習慣を持つ人びとが同じ社会で生活する機会が増えている。そのため、自分の常識だけを相手に押しつけるのではなく、相手の文化的背景を理解しようとする姿勢は、異文化共生のためにも重要である。 しかし、文化相対主義には課題もある。あらゆる文化的慣習を「その文化の伝統だから」という理由だけで無条件に認めてよいのかという問題である。たとえば、ある慣習が特定の人びとに深刻な苦痛を与えたり、人権を侵害したりする場合にも、文化の違いとして認めるべきなのかという難しい問題が生じる。また、一つの文化の内部にも、世代、性別、地域、社会階層などによって異なる意見があり、「その文化では皆が同じ価値観を持っている」と考えることも危険である。 したがって、文化相対主義とは、異文化のすべてを無条件に肯定することではない。まず自分自身の価値観も数多く存在する文化の一つから生まれたものであることを自覚し、相手の文化をその背景から理解したうえで、必要に応じて人権などの普遍的価値との関係について考える姿勢である。異文化をすぐに否定するのでも、逆にすべてを肯定するのでもなく、理解と批判の両方を可能にする視点として、文化相対主義は現代社会において重要な意味を持っている。
出題の意図	本問は、文化人類学の基本的な考え方である「文化相対主義」について、その意味

	を正確に理解しているかを確認することを第一の目的としている。特に、自らが属する文化の価値観や常識を基準として他文化を評価する「自文化中心主義」との違いを理解し、異なる習慣や価値観を、その文化が成立した歴史的・社会的背景から捉えることができるかを問う。 また、文化相対主義を単なる「異文化の無条件な尊重」と理解するのではなく、異文化理解や偏見の克服に果たす意義とともに、人権などの普遍的価値との間に生じる問題についても考察することを求めている。具体例を挙げながら、文化の多様性を理解する姿勢と、その限界や課題の双方を論理的に説明できているかを評価する。
--	---

設問番号	2.
解答又は 解答例	現在の社会では、国境を越えた人の移動が活発になり、異なる文化や宗教をもつ人びとが同じ地域や学校、職場で生活することが珍しくなくなっている。こうした社会で共存するために最も重要なのは、自分にとっての「当たり前」が、他の人にとっても当たり前であるとは限らないことを理解する姿勢だと考える。 私たちは、自分が育った社会の習慣や価値観を自然なものとして身につけている。食事の仕方、服装、家族との関係、男女の役割、宗教行事などについても、それぞれの社会には異なる考え方がある。例えば、宗教によっては食べることのできない食品があったり、決まった時間に祈りを行ったりする場合がある。それを自分の生活習慣と違うという理由だけで「おかしい」と考えるのではなく、なぜそのような習慣が大切にされているのかを知ろうとすることが必要である。 そのためには、相手について知ることと同時に、自分自身の文化を客観的に見ることも重要である。私たちは異文化に接したとき、相手の行動だけを「特殊」と考えがちである。しかし、自分たちの習慣も、別の文化から見れば不思議に見える場合がある。自分の価値観も数多く存在する文化の一つから生まれたものであると自覚すれば、相手の文化を一方的に評価するのではなく、互いの違いを理解しやすくなる。 また、異文化共生とは、単に相手の文化について知識を持つことだけではない。実際に相手と対話し、相手が何を大切にしているのかを知ることが必要である。同じ国や同じ宗教に属する人であっても、全員が同じ考え方を持っているわけではない。世代、地域、家庭環境、個人の経験などによって価値観は異なる。したがって、「〇〇人はこう考える」「〇〇教の人はこう行動する」と決めつけることは、新たな偏見を生む可能性がある。 一方、共存とは、文化の違いをすべて無条件に受け入れることでもない。異なる価値観をもつ人びとが同じ社会で生活すれば、意見や習慣が衝突することもある。その場合には、一方が自分の考えを押しつけたり、反対に「文化が違うから仕方がない」と問題を放置したりするのではなく、お互いの立場を説明し、共通して守ることができるルールを話し合うことが必要である。その際、人間の尊厳や基本的人権を尊

	重することも重要な基準になる。 私は、異文化共生に必要なのは、「違いをなくすこと」ではなく、「違いがあっても一緒に生活できる関係をつくること」だと考える。そのためには、自分の常識を絶対視しないこと、相手の背景を知ろうとすること、固定観念によって相手を判断しないこと、そして問題が起きたときには対話によって解決しようとするのが大切である。異なる文化や宗教をもつ人びとがお互いを理解しようとする姿勢を持つことによって、多様性を対立の原因ではなく、社会を豊かにするものとして生かすことができるだろう。
出題の意図	本問は、異なる文化や宗教をもつ人びとが共に生活する現代社会において、異文化共生のためにどのような理解や姿勢が必要であるかを、学生自身の言葉で考察できるかを問うものである。単に「異文化を尊重する」「相手を理解する」といった一般論を述べるだけではなく、宗教、食文化、生活習慣、価値観などの具体例を挙げながら、自分の常識を絶対視しない姿勢や、固定観念・偏見を避けること、対話の重要性などについて論理的に説明することを求める。 また、文化的差異を無条件に肯定するのではなく、共通の社会的ルールや基本的人権との関係について考える視点も重視する。授業で学んだ異文化理解の知識を踏まえつつ、それを現実社会の問題と結びつけ、自らの考えとして具体的かつ論理的に表現できているかを評価する。